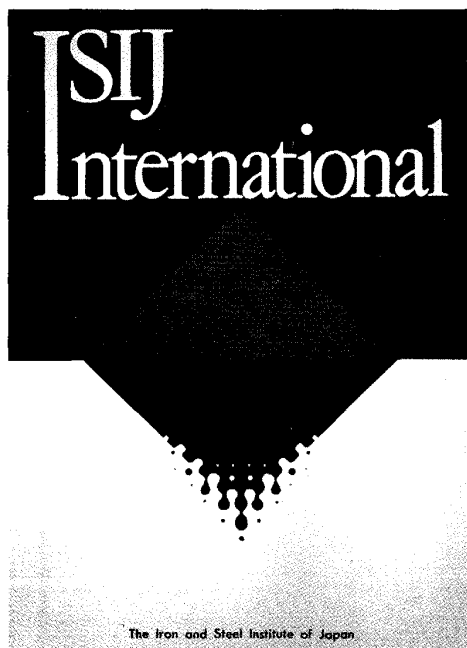


Debut



これが新しい欧文会誌の顔です。

熱や力が物質を創り出し、その物質がまわりの力で多彩に、無限に変化していく可能性への挑戦を示します。

1989年1月、*ISIJ International* のデビューです。

Debut

編集後記

今年は雨が多くて一向に気温の上がない異常な夏に続いて、再び長雨の秋がありやつと天候が回復するや早くも寒気が流れ込み、まだ10月中旬というのに例年より1か月も早く初冬を迎えました。この季節に、早くも12月号の編集後記を書くことになりました。

この後記は編集委員が順番で執筆しています。そのため、論文審査を行う側から会員への要望等に内容が偏りがちで、事務局からできるだけ柔らかい内容をとという注文を受けました。しかし、本号は本年最終号です、この1年間の編集状況を数字をあげて説明すべきだと思いましたので、あえて硬い内容を書くことに致します。

まず、今年はオリジナル原稿として、論文157編、技術報告62編、寄書7編が掲載され、技術報告の占める割合は27%に達しました。この割合は、昨年23%に比べて増加しています。その主因は、「連続製造-熱間圧延の直結化」特集号において33編中18編が技術報告だったことによるもので、他月号で比べますと昨年並みです。したがって、投稿しにくい技術的成果が特集号の企画により掘りおこされたとみることができ、たいへん好ましい波及効果であったと考えています。来年は、9月号に「複合材料」の特集号を予定しています。この萌芽領域での特集号企画は、研究分野の拡大への対応という本年とは別の意味での効果

をもたらすことが期待できるでしょう。

次に、論文掲載までの所要期間は、昨年約13か月から本年は11.4か月に短縮されました。特に、1月号から12月号まで見事な単調減少を示し、この12月号に限りますと10.3か月になりました。このように所要期間に関しましては改善に取り組んだ効果が現れていますが、本年は審査のあり方について編集委員会内外から多くのご批判をいただいた年でもあります。その主旨は、審査はオリジナリティの評価に徹すべきで、細かい事項への指摘で時間と労力を浪費すべきではないという主張です。このご批判は至極当然であります。まさにこの批判こそ本誌が目指す編集方針そのものであり、それを実行できるシステムと委員構成を作り上げる努力を編集委員会は進めております。一方、編集委員の立場からは、著者の責任で編集者の責任ではないと言つて見逃しきれない、推敲が足りない原稿も投稿されてくる現実があります。それを改善するのも編集委員の責務であるという議論もあります。いずれにしても、オリジナリティの掌握を中心とした、簡明かつ要を得た迅速な審査を進めていきたいと考えています。

今後ともご批判、ご要望をお寄せくださるようお願いし、良い新年を迎えられますことをお祈り致します。

(Y. K.)